

目的 腕付根周辺は、胴上部衣服の適合性が強く要求される箇所である。袖原型設計を目的として、個々の腕付根断面図の形態と、レプリカによる腕付根周辺の平面展開図の特性の把握を試み、身体計測値との関係を検討することを目的とした。

方法 資料は、19～22歳までの青年女子36名の身体計測原票と、同一個体についての腕付根断面図、レプリカによる腕付根周辺の平面展開図である。腕付根断面図を15度に分割し曲率を測定すると共に、クラスター分析によって形態の類型化を試みた。更に、肩先点より下筆線をひき、それを後腋点と前腋点を結んだ線で分割された4つの部位を前上、前下、後上、後下とし、それぞれの面積と曲率との関連を検討した。また、腕付根周辺の平面展開図より面積の算出と、原型状に整形した体表面近似展開図の作成を行った。

結果 腕付根断面図の前、後腋点を結ぶ、それを境に上、下に分けた上部の面積は腕付根矢状径、体重とは0.6の相関であるが、下部の面積はこれらの項目と相関は低い。クラスター分析により腕付根断面図の面積を分類した結果、①前下が小さく、後上が大きい型、②各部位が平均的な割合をもつ型 ③前下が大きく後上が小さいの3つの型の特徴をもつものに分類された。断面図の曲率は、後腋点は個人差が大きく、肩先点の位置の平均値は105度であった。腕付根周辺の平面展開図の面積と袖面積全体(58年発表)の相関は0.7を示すが袖山との相関は0.5であった。平面展開図の間の長さの大きいものは、アームホールの長さは小さく、肩先点を下筆した線を境界として前後に分けると前寄り、断面図面積との関係は、後上が大きく、前下が小さい傾向がみられた。